

なんちゃってSDGs、恥を知れ！

多胡秀人
2019/10/2

SDGsの専門家の話を聞く機会がありました。

とくに、MDGs (ミレニアム開発目標、2001年策定) からSDGsへの流れについての説明はわかりやすく、頭の整理ができました。MDGsにおける金融に関わる目標は、「開放的で、ルールに基づく、予測可能でかつ差別的でない貿易と金融システムを構築」であり、開発途上国へのODAのようなところにフォーカスされていたと思います。したがって、地域金融機関での認知度は低かったのです。

ところが、経済成長の要素に厚みが加わったSDGsでは「金融」が存在感を出してきます。2018年5月のESG金融懇談会(第5回)で、協同組織金融機関を代表してプレゼンテーションを行った京都信用金庫の増田理事長(当時)の指摘は、地域金融機関にとってのSDGsの本質を示しています。

- ・ ESG金融は社会貢献活動ではなく、本業に通じるものである。SDGsの中では目標8.10「国内の金融機関の能力を強化し、すべての人々の銀行取引、保険及び金融サービスへのアクセス拡大を促進する」に最もよく当てはまり、リレーションシップバンキングとも同じ考え方である。
- ・ 既に十数年前から我が国においてリレーションシップバンキングの重要性は指摘されてきたが、取組が十分に浸透しているとは言えない。これは金融機関の現場における対話能力不足や融資残高の増減等の旧来型の業績評価が根幹にある。

(環境省のホームページ、増田さんのプレゼン要旨より)

地域金融機関にとって、SDGsは「金融排除をするな!!」だと思います。

さて、環境省の「ESG 地域金融の先事例調査に関する検討会」の報告書「事例から学ぶ ESG 地域金融のあり方 ―ESG 地域金融の普及に向けて― (2019年3月) は、地域金融機関として目を通しておくべきペーパーです。

公表された時に一読したのですが、そこで取り上げられた事例集に違和感を感じました。繰り返しますが、地域金融機関にとって基本となる SDGs は「金融排除をするな」です。

ところが、事例集にある 9 つの金融機関の中には、地元の伝統産業等への融資や本業支援を疎かにし、隣県の大都市部へのビジネスに傾斜しているようなところもあります。メッセージ性の強い個別の取り組みだけを見て、好事例としてあげることは地域金融機関の SDGs の本質を歪めることになりかねません。いけませんねえ。

まずは「地元における金融包摂の姿勢はどうか」という全国共通一次試験にパスしない限り、個別事例の段階に行くべきではありません。なんちゃって SDGs と、本物の SDGs との違いは「金融排除か、金融包摂か」です。このことを改めて強く主張します。

昨今、地域金融機関における SDGs の取り組みで「私募債」が流行りものになっています。「〇〇銀行 SDGs 宣言、まずは寄付付き私募債から」などという新聞報道を見ると、オイオイとってしまいます。ちなみにこの〇〇銀行、先期は当期利益をはるかに上回る損失を外債投資で計上しています。(しかし、経営者は責任を取っていません) そういう銀行の SDGs 宣言が果たして信用できるでしょうか？ それとも心を入れ替えて地元での金融包摂を行おうとしているのでしょうか？ だったら「まずは寄付付き私募債」ではないでしょう。

先日、某地域金融機関で SDGs の行動指針につき議論しました。筆者の考えはシンプルです。地域金融機関の SDGs は、その思想を地域の事業者、個人、そして地域社会に定着させることに尽きるのです。地域金融機関の SDGs 行動指針は明確です。

ステップ(1)→ 組織的継続的なリレーションシップバンキングに磨きをかける中で、リレバン活動を SDGs の目標/ターゲットにひも付けし、役職員がそれをしっかりと腹に落とす。

ステップ(2)→ 役職員が一丸となって地域事業者、個人、そして地域社会に対し、日頃のリレバン活動の中で SDGs を浸透させる。

どうでしょう。

リレバンを「なんちゃって」でお茶を濁し、私募債や SDGs の冠を掲げた金融商品販売をもって SDGs をアピールするのは邪道です。

(了)

※※※ 無断転載はお断りします ※※※